# 転生したらサスロ・ザビだった件

Munch

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

今更転生ものです。ガンダムです。

だいぶ前に書いたものをちゃんと完成させようかと思い。発表の場をここにいたしました。

類似の作品の執筆されている方も複数おられますが、パクリにならないように未読にさせていただきます。なんせ、この手のネタですので、重複するような流れになっていた時はご勘弁を。

「ガンダム世界はディストピア」「人類史が少し違う」そんな世界で、無能な男が、人類の大量殺戮とジオン敗北を避けようとそれなりに頑張る話です。話はやや政治的にもなります。歴史的には、アニメｌｓｔ、オリジン、ギレンの野望、これらを主にベースにしております。

サスロ、マ・クベ、その辺りが活躍する予定です。

# 目次

一章　蛇の目 ―― 1
二章　落ちこぼれ ―― 5
三章　家族の肖像 ―― 8

# 一章　蛇の目

1

ストロングゼロを飲んで風呂に入ったら
揺り篭の中にいた。
気が付いたら揺り篭の中にいた。
なんにせよ、俺は転生したのだ。とにかく前世の記憶がある。
正直、この記憶がいつまでもつかはわからんが、とにかく今、流行の転生ものだ。
前世の記憶のあるチートスタートだ。
さて、どんな世界に生まれたのか？セオリー通りに異世界なのか？
セオリー通りに勝ち組スタートなのか？ならいんだが。
流石に最近は飽和してたから、裏をかいてとんでもない負け組スタートかも知れない。
まどマギみたいなやつだよ。ほら。セオリーの裏っかえっしの。
が。
しかし、その心配は無用。
なんせこの揺り篭だ。普通じゃない。金の装飾とかあるぞ。これ。
超いい感じ。絶対に金持ち。
乳母とか普通にいるしな。
とにかく親が金持ちなのは間違いない。
周りの大人もみんなとんでもなく、いい服着てる。
籠から抱き上げられて部屋を一望した時にはもう確信した。勝った。圧倒的に勝った。みたこともない調度品。
普通子供の部屋にこんなの置くかね。壺やら絵画やら。
これ服やら調度品やら、少し中世趣味っぽいけど、時代は未来だな。
バスタブで何となく察した。科学のある世界だ。中世じゃなくて良かったぜ。不衛生なリアルファンタジーやダークファンタジーは勘弁な。

2

言葉に関しては、最初わからなかったから、完全な異世界だと思ったけどね。英語でもないしな。フランス語やスペイン語だって習ってないけど、聞けばなんとなくわかるだろ？

まるで聞いたことの無い言葉だった。

とにかく、俺はどこかの国の王侯貴族だとは思ったけど。

俺の家族が喋ってるのがヘブライ語だってわかるのはもっと先だ。

おっと。それなのに俺は日本語でこれを書いてるな。てことは俺の記憶、俺の前世の記憶が生涯、維持できたことはもうネタバレだな。段々、忘れるようなパターンでは無かったよ。

まぁ前世じゃ碌な生き方してなかったから、あんまし役に立たなかった……

と言いたいが、この古い地球の知識は、大事な友を得るのには非常に役にたった。

続けようか。

当時、俺の限られた視界に入るのは、

乳母のデボラ。その他多数の、お祝いにくる来客たち。

やたら顔色の悪い禿かかった父親。名前は「旦那様」。

どっかで見た顔だとは思ったけど、頭がどんがってる禿げとしかその時は思わなかったね。

たまに顔を見せる母。ほんとにたまにだ。あまり愛されていないのかも知れない。名前すらわからない。

そして、ギョッとした。

初めて見た時には本当にギョッとした。

俺を見下ろす、その少年の目はまるで蛇のようだった。

俺を見ながら笑いもせず、ただ無感情に見えた。そして最後にフッと鼻を鳴らして去っていった。

蛇は兄だった。

3

たまに姿を見せる蛇は最後にいつもフッと鼻を鳴らした。

冷笑というか軽蔑というか、まさに「一瞥」という感じだった。

本当に不可解な少年だった。

「こんなくだらないものどうでもいい」という態度ではあるが「こいつをどう使うか」のような関心も持っていたのだろう。だから何度か俺を見に来てたんだとは思う。しかし、どちらかと言うと「こいつは使えんな」だったかも知れない。

まぁ少年と言っても、こちらは赤ん坊なわけで、

まさに俺からすると巨人だったわけで、まさに兄だったわけで、俺は基本的に蛇に睨まれた蛙のような気持ちだった。

蛇に関してはいまだによくわからない。わかった部分もあるが、それが演技だったのか、本当の姿だったのか。

冷徹なのか、甘いのか、孤独なのか、いや孤高なのか。

とにかく、乳母のデボラが蛇の名前を呼んだ時に

全てが判明した。

「ギレン坊ちゃま。サスロ様がおびえていますよ。ほどほどに」

4

確かに、俺はサスロと呼ばれていたが、何分、最初は言葉がよくわからんかったしな。赤ちゃんとか坊ちゃんみたいなもんかと思ったし。「さする」みたいでヨシヨシかと思ってたよ。

親父はみんな「旦那様」だしな。

だけど「ギレン」の名を聞いて全てが判明した。

こりゃとんでもないことになった。とね。

俺はガノタだから知っていたんだ。俺が戦争の始まる世界に産まれたこと。この世界がいわゆる、ディストピアだってこと。

そして、そもそも戦争が始まる前に俺は爆破テロで暗殺されること。

こりゃとんでもないことになった。

とんでもないことになった。

とんでもないことになったんだよ。

俺は揺り篭の中でジタバタした。泣きたかったが、泣いてもミルクを飲まされるか、オムツを替えられるだけだ。

本当にまいってしまった。

とりあえず生き延びよう。

生き延びたい。
君は生き延びることができるか？
って？やかましいわ。

# 二章　落ちこぼれ

1

いやー本当に幼年期はなんとかなったんだよ。
前世知識のパワーもあってさ。せめて中学生までは秀才扱いかと思ってたよ。
全然ダメだった。
この世界の奴らは基本的に理系の天才だらけ。
いわゆる、技術職に特化した教育制度、エリート制度もあるんだろうけど、宇宙で生きていくための必要な素養を皆がもっている感じだ。
あとからサイド3の教育水準、知的水準は特に高いことがわかったんだが、とにかく俺は数学が完全にミドルスクールの最初でついていけなくなった。その先の工学や物理学も当然だ。宇宙工学？何それ食べれるの？状態。
「あいつの弟だから、期待してたのに」
これが俺の評価になった。
兄貴の関心も次第に俺からは薄れていったね。
ドズルが産まれた後は猶更。
ドズルは巨躯のやんちゃものだったけど、意外に勉強はできた。もちろん、理系がな。
ドズルの評価は
「あいつの弟なのに」
「あの見た目なのに」
だった。
そして「いやいや、そもそもギレンの弟だし」「いやいや、そもそも体はサスロもでかいし」と言った言葉が続くわけで、俺は完全に、一家の落ちこぼれになった。
ＩＱ２４０の天才児の兄と
獣みたいなのに意外と知的な弟に挟まれた
無能な俺

親父はそんな子供らを責めもせず、褒めもせず、相変わらず家の中では「旦那様」で、そういう兄弟達を傍観していた様子だった。
正確には「観察」だったんだろうけどな。

2

そんなわけで俺は早いうちに進路を文系に決めた。
地球の歴史の「特定の時代」の知識がもともと豊富だったし、将来は地球史博物館の名誉館長にでも親父パワーでなれればいいと思いだしたね。
必然、一家の「家業」から離れれば、俺が暗殺される危険も減るわけだ。
無能なことと、生存戦略が一致した完全な方程式だ。
馬鹿が方程式とか言うと、余計に馬鹿っぽいけどな。
とにかく、俺は「自分のできることだけしよう」と、文系、とくに地球の歴史の専門化にはなっていくことになる。

3

ただ、やはり気になるのは、この世界、この時代の理系偏重だった。
サイド3以外もそうだが、スペースノイドはとくに、人文学的な教養があまりなく、地球時代の歴史にも無知・無関心で、政治的に蒙昧な印象があった。
つまりは、
生存のために、
宇宙という過酷な空間で生きるために、
スペースコロニーという高度な技術の結晶を維持し運用するために、全住民が、技術者を目指すような教育制度で、それなりの教育水準の層でも、所謂、民主政治制度、権力分立、人権概念などをほとんど理解していない。それらを地球の制度の模倣で、前時代の残滓とすら思ってる風潮がある。
軽視どころではない。無視だ。
「そんなものに構っていたら、魚は釣れない」「そんなものに構っていたら、コロニーは動かせない」と言った感じだ。

ジャーナリズムの空白、メディアリテラシーの低さ、議会制度の形骸化、それだけではない、文芸的な文化も余り盛んではない。

高度なテクノロジーの生活基盤と同時に並立している、社会の稚拙さ。

俺はこの世界に、成長するとともに感じ始めた。

「やはり、この世界は、ディストピア前夜なんだ」と。

# 三章　家族の肖像

1

正直、妹が生まれるまでは、この世界に馴れようと四苦八苦するだけで

家族のことをまともに見て無かったかも知れない。

家族というよりも「このガンダム世界」の一部のように俯瞰してたし、この世界が戦争で壊れ、この家族が死ぬことを真面目に考える余裕は無かった。

なんせ俺自身の暗殺の問題もあったしな。「他人」のことを考える余裕はなかった。

妹が生まれた時に、俺は二つのことを考えた。

「俺のガノタ知識だと、こいつが俺を暗殺する可能性大なんだよな。安彦のＴＨＥ　ＯＲＩＧＩＮではそんな空気だった」

「あとこいつが、ギレン兄貴も殺すのか」

俺は、俺の命を守ると同時に、家族のことも考えだした。

兄貴はとにかく天才で、スーパーマンで、なんでもできて、目つきは悪いけど、イケメンの部類だったし、人を寄せ付けないかのようでいて、「フッ」と時に笑って、他人のメンツや立場を配慮する発言もしてあげたりもできて、人を操る術を、全て知っているような人物だった。

ＩＱ２４０のカリスマ独裁者。まさにそれの卵だ。何を考えてるかわからんが、俺が無能すぎて役に立たないことはわかってるようだった。

弟のドズルはとにかく絵に描いたような、剛直番長だ。親分肌で喧嘩が強くて、強面で、それでいて案外優しくて、

それでいて、結構、勉強もできる。

親父は、「旦那様」で君主のような人だった。

誰も逆らわないし、君臨する人だった。色々と政治活動も当然、始めてメディアにも名前が載り出してた。何をやっているかわからんが、

兄貴は「何をやってるか知ってますけどね」と言う風で、弟はとにかく、偉大な親父を尊敬していた。
俺は、怯えてるに近かったかな。
当然、「パパ。俺、前世の記憶が俺にはあるんだけど」なんて言えないしないな。それを悟られるのも怖かった。まぁ言ったところで、精神病院だろう。当時は俺は自分のことだけで精一杯だ。
俺を変えたのが妹だったかも知れない。
妹の存在はいやがおうでも、俺を「この世界の現実」に引き戻させた。

2

そもそも、この家族はどこか歪んでいたとは思う。
母親が同居しておらず、まともに母に会ったことがない。
兄妹の母親が違うと言うのはたぶん、本当だ。
だから、「別の母」に遠慮して、母が家にはいないのだ。
俺は転生脳だし、兄貴はあんなだから、母親をそこまで必要としなかったが、ドズルは乳母のデボラが母の代わりだった。
ドズルはだいぶデボラに甘えていたな。
ただ、親父の威光と、英邁な兄貴に照らされて、そのうち、やたら男気キャラになって「ザビ家の漢は～」とか言い出したわけ。俺のようになったらまずいという危機感だろうか。いや、俺のいない世界、というか、俺がそこそこ有能だったはずの「本物のサスロのいた」世界でも、ああなったわけだし、よくわからんな。
問題はキシリアだ。
キシリアが生まれて半年ほどした時に、デボラが亡くなってしまった。
なるほど彼女は母親不在で育つわけだ。家には男だけで、使用人はいても、母のいない家庭。それが彼女を歪ませるのかも知れない。
流石に考えたよ。
赤ん坊のキシリアを見て。彼女を殺せば、全て解決するんじゃないかと。

俺は生き延びることができるかも知れない。
だけど、できなかった。普通無理だろ。赤ん坊殺すとか。
だから俺は逆に考えた。俺がこの子に構いまくって、残忍じゃなくすればいいんだと。